The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポルトガル語学習者の学習動機調査
Author(s)	鳥越, 慎太郎
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ポルトガル語学習者の学習動機調査[1]

鳥越慎太郎

1.　はじめに

本研究は、日本のポルトガル語学習者の学習動機を調査したものである。複数の大学でポルトガル語教員として勤務してきた筆者は、各大学からブラジルポルトガル語を教授することを求められた。しかし、学生の関心の対象はブラジルに限らず、ポルトガル、さらにはアフリカと、大学のシラバスが定める以上に幅広く、各大学の「ポルトガル語」の授業が学生のニーズに合致していないという感覚を得た。この感覚を客観的なデータとするべく、6 年間に渡り、各大学のポルトガル語学科・専攻科の新入生、及び第二外国語ポルトガル語初級の履修生を対象に、学習動機調査を行った。本稿は 6 年分のアンケートデータを集計、分析し、特に関心のある地域と学習分野に着目して提示するものである。

2.　背景

2.1.　日本の大学のポルトガル語

現在、日本国内の大学におけるポルトガル語教育はブラジルポルトガル語に重きが置かれている。以下、表 1 はポルトガル語学科・専攻を置く 7 大学[2]の 2019 年度シラバスより、ブラジル変種及びヨーロッパ変種を扱う授業が明示されているかをまとめたものである。ヨーロッパ変種の授業を明示しているのは 4 大学にとどまる。

次に、表 2 に各大学のポルトガル語専攻・学科の地域科目の授業題目をまとめた。全体的にブラジル関連が多くなっているほか、文学や歴史、社会学を開講する大学が多く、政治・経済を開講する大学は少ない。また、アフリカやアジア圏に関する授業はさらに少数である。

---

[1] 本稿は日本ポルトガルブラジル学会 2019 年度大会における口頭発表を元に加筆修正をしたものである。

[2] 2023 年度からは愛知県立大学もポルトガル語専攻コースを設置している。

表 1 ポルトガル語学科・専攻のカリキュラム (学習変種)

大学	カリキュラム	
	ブラジル変種	ヨーロッパ変種
大阪大学	○	○
神田外語大学	○	
京都外国語大学	○	○
上智大学	○	○
天理大学	○	
東京外国語大学	○	○
常葉大学	○	

表 2 ポルトガル語学科・専攻のカリキュラム (開講授業)

大学	カリキュラム			
	ブラジル関連	ポルトガル関連	アフリカ関連	アジア関連
大阪大学	文学、社会学、歴史	文学、日ポ関係史		
神田外語大学	芸術、文化、政治・経済、語学概論	(語学概論) *		
京都外国語大学	文学、社会学、歴史	文学、社会学、歴史	語学概論	
上智大学	政治、経済、開発協力	文学、歴史	ルゾフォニア論、クレオール語、アフリカ史	マカオ研究、アジア研究
天理大学	歴史、社会学、文化、宗教			
東京外国語大学	文化、文学	文学、歴史、言語論	ポルトガル語圏研究	
常葉大学	社会、文化	(文化) *		

*授業の一部でポルトガルに関する内容を扱っているもの

続いて、表 3 に第二外国語としてポルトガル語を開講している大学で、ブラジル変種及びポルトガル変種を扱う授業が明示されているかをまとめた。調査した 24 大学中[3]、すべてがブラジル変種を扱っていると明示する一方、ヨーロッパ変種を扱っているのは僅かに 3 大学であった。なお、第二外国語のシラバスでは、語学を通じてのブラジルの社会・文化や政治・経済の学習が明示されることも多い。

[3] 東京外国語大学語学研究所「語学教育情報」参照
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/contents/langedu_index.html

表 3 第二外国語授業のカリキュラム (学習変種)

大学	ブラジル変種	ヨーロッパ変種	大学	ブラジル変種	ヨーロッパ変種
愛知県立大学	○		上智大学	○	?
宇都宮大学	○		高崎健康福祉大学	○	
大阪大学	N/A	N/A	拓殖大学	○	
桜美林大学	○		天理大学	○	
神奈川大学	○		東京大学	N/A	N/A
関西外国語大学	○		東京外国語大学	○	○
神田外語大学	?	?	常葉大学	○	
京都外国語大学	○	○	獨協大学	N/A	N/A
群馬県立女子大学	○		名古屋外国語大学	○	
群馬パース大学	○		南山大学	○	
慶應義塾大学	○	○	防衛大学校	N/A	N/A
神戸市外国語大学	○		立教大学	○	

?: 文面では判断が難しい例

2.2. 日本国内で流通するポルトガル語教材

本節では独習を念頭に置き、市販の教材が扱うポルトガル語変種を見ていく。表 4 は、鳥越&山田 (2015) で調査した、1990 年以降に出版され現在も市販される日本国内のポルトガル語教材の分類である。

表 4 日本国内で流通するポルトガル語教材 (鳥越&山田 2015 より)

	ダイアローグ導入型文法テキスト	表現導入型文法テキスト	文法テキスト	目的別	表現リスト	単語リスト	文法書	文法エッセイ
1990～1999	黒澤 (1996)							
	トイダ・ネーヴェス・大野 (1997)					吉浦 (1991)		
2000～2009	黒澤 (2000)	松崎 (2003)	田所&伊藤 (2000)		中野 (2000)	香川 (2003)		田所&伊藤 (2009)
	武田 (2001)	浜岡 (2009)	高橋 (2009)		武田 (2002)	深沢&Inoue (2003)	田所&伊藤 (2004)	市之瀬 (2007/2015)
	香川 (2007)				田所 & 伊藤 (2007)	浜岡 (2006)		
	浜岡 (2007)							
2010～	深沢&和嶋 (2012)	彌永 (2010)		野中 (2010)	田所 (2013)	田所・伊藤・佐藤&アラウージョ (2010)	富野&伊藤 (2013)	浜岡 (2010)
	田所・伊藤・本多 (2011)	瀧藤 (2014)		野中 (2012)	浜岡 (2013)	トイダ (2012)	田所・カルヴァーリョ・アイレス (2013)	市之瀬 (2012)
	重松 (2014)			浜岡&モンテイロ (2012)	浜岡 (2014)	福森 (2013)		荒川 (2013)
	和嶋&野中 (2014)			岩村 (2013)				

このうち、ヨーロッパ変種を扱っているのは松崎 (2003)、彌永 (2010) の語学教材と、市之瀬 (2007/2015)、市之瀬 (2012) の語学エッセイに限られる。またこの調査の後、内藤 (2019) が出版されているが、それでも圧倒的にブラジル変種が占めており、市販教材を通じてヨーロッパ変種及びポルトガルやアフリカ諸国の社会文化事情を学習できる機会は限られる。

2.3. 要因

以上のように、日本国内におけるポルトガル語教育・学習がブラジル変種を重視している要因として、第一にブラジルの経済的な存在感と市場規模が考えられる。ブラジルはポルトガル語圏国家共同体の約 3 分の 2 を占める、2 億人以上の人口を有し[4]、豊富な資源と労働力をもとに経済成長を遂げただけでなく、産業の多角化にも成功している。第二に、日系移民及び日本国内のブラジル人人口の影響も挙げられる。ブラジルへの日系移民及びこれにより形成された日系社会の存在は、他のポルトガル語圏よりも強い精神的・文化的なつながりを日本にもたらしていると考えられる。また、日本国内の約 20 万人[5]にも及ぶブラジル系住民の存在は、ブラジル変種を学習するより実践的な動機となり得るであろう。

2.4. 疑問・調査の動機

以上、ブラジル変種に重きが置かれる要因を挙げたが、ポルトガル語専攻で学ぶものがブラジル言語文化だけでよいのかは疑問である。大航海時代に言語文化の面で世界中に影響を及ぼし、現在は EU など国際機関でも存在感を見せ始めているポルトガル、アフリカ随一の資源大国のアンゴラ、世界最大規模の天然ガス田など経済的潜在力を秘め、日本の経済界からも注目されるモザンビーク、「自由で開かれたインド太平洋戦略」で地政学的に重要視される東ティモール、中国の「一帯一路」政策においてポルトガル語圏との窓口として機能するマカオなどついて、学習する機会が限られている状況は好ましいとは言い難い。また、語学を通じて社会文化を学習することの多い第二外国語においても、ブラジル以外のカリキュラムや教材がほぼ整備されていないことは、深刻な学習機会の喪失ではないか。

---

[4] 2019 年 4 月現在 (国連ニュース ONU News 2019)。

[5] 2018 年末現在 (総務省 2019)。

また、ポルトガル語を学習する学生の視点からも、カリキュラムや教材のほとんどがブラジル変種に占められるほど、ブラジルの言語文化だけを求めているのかは検証の必要がある。ポルトガル語学科・専攻の学生や第二外国語でポルトガル語を履修する学生の大多数はヨーロッパやアフリカには関心を持っていないのだろうか。実際にはどのような分野に関心を持っているのだろうか。そして各大学のカリキュラム・シラバスや、流通する教材は、学習者のニーズに合っているものなのだろうか。

本調査は以上の疑問に基づくものである。

2.5. 先行研究

ポルトガル語の学習動機を調査した、いわゆるニーズアナリシス研究は前例がほとんどない。ブリガム・ヤング大学のポルトガル語学習者の学習動機を調査した Bateman & Oliveira (2014) でも、同研究以前に量的な学習動機調査を行った事例は見当たらなかったとされる。同研究では、米国でのポルトガル語は主にスペイン語母語話者が言語的近接性及び道具的条件付け (将来の就職など) のために学習するケースが多く、一方で、ポルトガル系、ブラジル系移民による継承言語としての関心は低いという結果が出た。なお、同研究では学習されるポルトガル語はブラジル変種を想定している。

また、京都外国語大学 (2018) では、新入生を対象に入学動機や事前知識、関心のある地域及び変種、留学希望などの調査を実施している。同報告書ではヨーロッパ変種への関心がやや高い。

3. 研究設問

本稿ではポルトガル語を学習する大学生が持つ関心について、特に以下の 2 点を研究設問として、全体及び大学別に分析し、考察する。

①ブラジルへの関心が圧倒的多数を占めるのか

②どのような学習分野に関心を持っているのか

4. 方法論

本調査は学生へのアンケートに基づく。アンケートは 2013 年から 2019 年にかけて、10 の大学のポルトガル語学科・専攻 (以下、「専攻学科」) の 1 年生、及び第二外国語ポルトガル語を履修する学生に対し、学年または

学期開始後なるべく早い時期に実施した。当初は紙に記入して提出する方式であったが、徐々にウェブを用いた電子アンケートに切り替えた。アンケートは「個人データ」、「事前知識」、「関心地域」、「留学希望」、「学習希望変種」、「関心分野」からなる。以下「個人データ」と、本稿で扱う「関心地域」、「関心分野」のみ紹介し、他は割愛する。

・個人データ

まず、所属機関 (大学) 名、学年、年齢 (生年月日)、 専攻、出身地を記入する。ただし個人名は記入させない。一方、学籍番号を記入させることで提出の担保と虚偽の記入をさせないよう心的に働きかけるとともに、アンケートの内容が学生の評価に影響しないことを注釈した。

・関心地域

「2. ポルトガル語圏のどの地域に特に関心がありますか(複数回答可)」という質問で、学習したい地域を問う。選択肢はポルトガル、ブラジル、アンゴラ、カーボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウ、サントメ・プリンシペ、モザンビーク、東ティモール、マカオ、赤道ギニア (2016 年より)、その他とした。特に注釈はしていないが、ポルトガル語変種のほか、社会文化を学習したい地域を念頭に置いている。

・関心分野

「5. ポルトガル語圏各地域のどのようなことに関心がありますか (複数回答可)」という質問で、学生の関心分野を問う。設問はスポーツ、音楽、経済・産業、言語、社会、食文化、身近にいるポルトガル語圏出身の友人、知人及び、彼らとのコミュニケーション (2014 年より)、政治、日本との関係、美術、文学、歴史、その他 (自由記述) からなる。各項目の選択は、大学シラバスの地域科目の授業題目を参考に挙げたが、美術と文学及び音楽、社会と政治及び歴史など、区分が曖昧なものも含まれている。また、拾いあげられていない項目もあるが、その他 (自由記述) を設けることで、補えるようにした。

・実施機関

本アンケートは首都圏 3 大学、北関東 2 大学、東海 2 大学、関西 3 大学

の 10 の大学で実施された。首都圏の 2 大学は専攻学科と第二外国語でそれぞれ実施された。また、大学によっては複数年実施した大学もあれば、1 年だけ実施した大学もある。各年のインフォーマント数は表 5 のとおりである。

表 5 アンケート実施機関と年別インフォーマント数

大学	授業	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	計
首都圏A	専攻	21	25	25	21	24	17		133
首都圏A	第二	19	31	23	30	25	6		134
首都圏B	専攻		58	59	65		57	52	291
首都圏B	第二							13	13
首都圏C	専攻				32	18	46	44	140
北関東A	第二		13	20	27	23	11	8	102
北関東B	第二					22	5	14	41
東海A	専攻					20	27		47
東海B	第二				10				10
関西A	専攻		57		64	55	25	37	238
関西B	第二				12				12
関西C	専攻				6				6
計		40	184	127	267	187	194	168	1167

5. 分析結果

5.1. 関心地域

5.1.1. 全体の傾向

まずは、学習者が関心を持つポルトガル語圏地域を見ていく。表 6 は各地域が得た回答数と全インフォーマント 1167 人に占める割合である。

表 6 関心のあるポルトガル語圏地域

地域	回答数	割合	専攻	第二	地域	回答数	割合	専攻	第二
ブラジル	952	82%	711	241	サントメ・プリンシペ	16	1%	12	4
ポルトガル	794	68%	641	153	ギニア・ビサウ	16	1%	13	3
マカオ	163	14%	137	26	その他	3	0%	2	1
東ティモール	108	9%	89	19	その他(日本)	2	0%	1	1
モザンビーク	84	7%	73	11	その他(アフリカ全般)	1	0%	0	1
アンゴラ	65	6%	49	16	その他(韓国)	1	0%	1	0
赤道ギニア	32	3%	21	11	無回答・特になし	6	1%	2	4
カーボ・ヴェルデ	17	1%	14	3	合計	1167		877	290

ブラジルに関心を持つ学生が全体の 8 割以上と圧倒的に多くなっている。一方、ポルトガルも 68%と多く、学習者の関心はブラジル一辺倒ではないことがわかる。ただし、ほとんどがブラジルとポルトガルに集中しており、それ以外への関心は極端に少ない。アジア地域への関心はアフリカ地域への関心よりも多く、マカオは 14%、東ティモールは 9%となっている。アフリカ地域への関心はいずれも 10%以下となっている。また、専攻学科と第二外国語の別に見ても、順位やバランスはほとんど変わらない。

5.1.2. 大学別の傾向

次に関心地域の各年大学別の傾向を、主成分分析[6]を用いて分析した。主成分分析は各変数 (大学) の分散[7]を説明する主成分を導き、さらにその主成分の構成要素 (関心地域) を算出し、全体の特徴を把握するものである。主成分得点 (表 7) は主成分を構成する各検体 (関心地域)を説明する数値である。主成分負荷量 (表 8) は各主成分と各変数 (大学) の相関係数で、高ければ高いほど関係が強い。

表 7 関心地域主成分得点 (「その他」は割愛)

検体名	主成分 1	主成分 2	検体名	主成分 1	主成分 2
アンゴラ	-1.981	0.342	ポルトガル	13.594	-3.166
カーボ・ヴェルデ	-2.81	0.172	マカオ	-0.142	-0.357
ギニア・ビサウ	-2.855	0.088	モザンビーク	-1.592	-0.045
サントメ・プリンシペ	-2.879	0.019	赤道ギニア	-2.407	-0.167
ブラジル	17.713	2.591	東ティモール	-1.091	-0.133

分析の結果、2 つの主成分が検出された。主成分 1 の寄与率、すなわちデータ全体に対する説明率は 95.07%、主成分 2 は 2.79%であった。つまり、主成分 1 で全体のほとんどを説明できることとなる。

主成分 1 はポルトガルとブラジルへの関心が高く (表 7)、その他への関心は低いという特徴からなり、すべての大学で負荷量が高い (表 8)。一方、主成分 2 はブラジルへの関心が高く、ポルトガルへの関心がマイナス値という特徴からなり (表 7)、首都圏 A(第二)(2013,2014,2016,2017)、

---

[6] 統計分析には Seagull-Stats (有償版) を用いた。
http://www7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/

[7] 本来は散布図を示すものであるが、紙幅の都合上割愛する。

表 8 関心地域主成分負荷量

変数名	主成分 1	主成分 2	変数名	主成分 1	主成分 2
首都圏A(専)2013	0.9949	-0.0536	関西A2017	0.9805	-0.1725
首都圏A(二)2013	0.9639	△0.2217	北関東A2017	0.9842	0.1594
首都圏A(専)2014	0.9591	-0.0893	北関東B2017	0.9666	0.1000
首都圏A(二)2014	0.9568	△0.2716	東海A2017	0.9873	-0.0507
関西A2014	0.9866	-0.1289	首都圏C2017	0.9871	-0.0924
首都圏B(専)2014	0.9809	-0.0755	首都圏A(専)2017	0.9936	0.0216
北関東A2014	0.9922	0.0299	首都圏A(二)2017	0.9467	△0.2662
首都圏A(専)2015	0.9898	-0.0845	関西A2018	0.9786	-0.1596
首都圏A(二)2015	0.9735	-0.1787	北関東A2018	0.9879	-0.1161
首都圏B(専)2015	0.9939	-0.0450	北関東B2018	0.9031	-0.3913
北関東A2015	0.9886	0.0918	首都圏B(専)2018	0.9570	-0.0589
関西A2016	0.9954	-0.0713	東海A2018	0.9936	-0.0943
北関東A2016	0.9950	0.0657	首都圏C2018	0.9896	0.1082
首都圏B(専)2016	0.9877	-0.0499	首都圏A(専)2018	0.9564	-0.1443
関西B2016	0.9802	-0.1089	首都圏A(二)2018	0.9626	-0.1010
首都圏A(専)2016	0.9979	0.0121	関西A2019	0.9574	-0.2282
首都圏A(二)2016	0.9387	△0.3436	北関東A2019	0.9868	0.0288
東海B2016	0.9610	△0.2352	北関東B2019	0.9895	-0.0227
首都圏C2016	0.9947	-0.0742	首都圏B(専)2019	0.9928	-0.0761
関西C2016	0.9241	△0.3582	首都圏B(二)2019	0.9166	△0.3898
△: 主成分2で0.2以上			首都圏C2019	0.9952	0.0088

東海 B、関西 C、首都圏 B(第二)との相関が比較的高い (表 8)。すなわち、これら以外の大学では、ブラジルとポルトガルの両方に対する関心が高い。

5.2. 関心分野

5.2.1. 全体の傾向

続いて、学習者が関心を持つ分野について見ていく。表 9 は各項目が得た回答数と全インフォーマント 1167 人に占める割合である。

全体の傾向として、「言語」と「食文化」への関心が 49%と最も高く、次いで「音楽」と「日本との関係」(ともに 42%)、「歴史」(37%) と「社会」(36%)、「スポーツ」(34%) と続く。文化的な分野に関しては、「食文化」のほかサブカルチャーでは「音楽」、「スポーツ」への関心が高い一方、「美術」への関心は低く(21%)、「文学」への関心は極端に低かった(14%)。社会学的な分野については、「歴史」と「社会」への関心が高い一方、「経済・産業」(20%)、「政治」(19%) といった現代社会関連の分野への関心が低かった。また、「身近なポルトガル語圏出身の知人とのコミュニケーション」(以下、「身近なネイティブ」) への関心は 25%とやや低かった。

表 9 関心分野

関心分野	合計	割合	関心分野	合計	割合
言語	569	49%	その他(教育)	2	0%
食文化	568	49%	その他(習慣)	2	0%
音楽	495	42%	その他(作法, マナーなど)	2	0%
日本との関係	485	42%	その他(コパカバーナビーチ)	1	0%
歴史	435	37%	その他(リオのカーニバル)	1	0%
社会	422	36%	その他(旅行したいから)	1	0%
スポーツ	394	34%	その他(貧困)	1	0%
身近にいるポルトガル語圏出身の友人、知人及び、彼らとのコミュニケーション (2014～)	286	25%	その他(もっと自分の母国のことを知りたかったから)	1	0%
美術	249	21%	その他(国民性)	1	0%
経済・産業	234	20%	その他(日本の宗教の布教)	1	0%
政治	225	19%	その他(ポルトガル語圏の民族)	1	0%
文学	161	14%	その他(建築物)	1	0%
その他 (詳細記述なし)	6	1%	その他(アニメなどの日本文化がどう影響してるか)	1	0%
その他(宗教)	3	0%	無回答・特にない	3	0%

5.2.2. 大学別の傾向

次に主成分分析で各年大学別の傾向を見ていく。分析の結果、4 つの主成分が検出された。主成分 1 の寄与率は 81.62%、主成分 2 は 4.97%、主成分 3 は 3.59%、主成分 4 は 3.13%で、4 つの主成分で全体の 93.31%が説明できる。以下、各主成分の特徴を見ていく。

表 10 関心分野主成分得点 (「その他」は割愛)

検体名	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4	検体名	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4
スポーツ	5.966	△1.961	0.428	▼-2.854	身近にいるポルトガル語圏出身の友人(2014～)	3.913	-1.55	▼-4.434	1.618
音楽	10.407	△2.607	0.585	△3.192	政治	0.837	-1.481	△0.644	-0.744
経済・産業	1.232	-0.897	△1.292	▼-1.594	日本との関係	9.183	-0.288	0.693	▼-1.376
言語	10.768	▼-2.145	▼-2.803	▼-1.708	美術	3.146	1.025	1.194	1.509
社会	6.337	▼-3.748	△2.81	0.591	文学	0.013	△0.872	-0.061	▼-1.173
食文化	12.215	△3.714	-0.275	-0.346	歴史	7.504	▼-2.498	0.989	1.642

△: 主成分1以外での主成分間で極端に高い値、▼: 主成分間で極端に低い値

表 11 関心分野主成分負荷量

変数名	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4	変数名	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4
首都圏A(専)2013	0.9447	0.1158	0.1772	-0.1938	関西A2017	0.9605	0.0441	-0.1783	-0.0726
首都圏A(二)2013	0.8664	△0.3355	△0.2473	▼-0.2053	北関東A2017	0.9527	-0.0714	-0.0720	-0.0105
首都圏A(専)2014	0.8939	-0.1161	△0.3554	-0.0718	北関東B2017	0.8831	△0.2257	-0.0770	▼-0.2071
首都圏A(二)2014	0.9501	0.0780	△0.1998	-0.0046	東海A2017	0.9302	△0.2193	▼-0.2303	0.0119
関西A2014	0.8698	0.1093	-0.1169	▼-0.2910	首都圏C2017	0.9604	-0.0805	-0.1086	-0.1130
首都圏B(専)2014	0.8347	▼-0.3485	△0.2717	▼-0.2509	首都圏A(専)2017	0.9050	▼-0.3785	0.0629	-0.0151
北関東A2014	0.8801	△0.2709	0.0011	-0.0502	首都圏A(二)2017	0.8009	0.0288	0.08	△0.4203
首都圏A(専)2015	0.9677	-0.1511	0.0906	0.0351	関西A2018	0.9584	0.0922	-0.1783	-0.0758
首都圏A(二)2015	0.8963	0.1540	0.0928	△0.2351	北関東A2018	0.8191	0.1333	△0.2072	△0.3189
首都圏B(専)2015	0.9200	▼-0.2933	0.1969	-0.0267	北関東B2018	▼0.6692	△0.6482	0.1493	▼-0.2346
北関東A2015	0.9707	-0.1158	0.0257	-0.0223	首都圏B(専)2018	0.8901	▼-0.3146	0.1956	-0.1674
関西A2016	0.9769	-0.0080	-0.0488	-0.1338	東海A2018	0.9420	0.0278	-0.1977	0.1214
北関東A2016	0.9302	△0.2193	▼-0.2303	0.0119	首都圏C2018	0.9699	0.0591	-0.1535	-0.0327
首都圏B(専)2016	0.9219	▼-0.2067	0.1585	-0.0707	首都圏A(専)2018	0.9310	▼-0.2717	0.0626	0.0849
関西B2016	0.9364	▼-0.2576	-0.0785	0.0771	首都圏A(二)2018	▼0.6564	△0.2709	△0.3373	△0.5329
首都圏A(専)2016	0.9608	-0.0762	0.1585	0.0275	関西A2019	0.9603	0.0776	-0.1783	0.0016
首都圏A(二)2016	0.8521	△0.3116	-0.0737	△0.2274	北関東A2019	0.9157	-0.1147	-0.1758	0.1764
東海B2016	0.9310	-0.1051	-0.1391	△0.2690	北関東B2019	0.8415	△0.3471	0.0369	-0.1173
首都圏C2016	0.9891	0.0206	-0.0399	-0.1115	首都圏B(専)2019	0.9285	▼-0.3005	0.1104	-0.0556
関西C2016	▼0.6481	▼-0.2679	▼-0.6204	0.0361	首都圏B(二)2019	0.9154	-0.1040	-0.0646	0.1803
					首都圏C2019	0.9601	0.0454	-0.1804	-0.0712

△: 主成分2以降で0.2以上、▼: 主成分1で極端に低い数字及び主成分2以降で-0.2以下

主成分 1 は「全体的に関心が高い」という特徴で(表 10)、大部分の大学で 0.9 以上と負荷量が高いが、関西 C(2016)と第二外国語の首都圏 A(第二)(2018)、北関東 B(2018)では 0.6 台とやや低くなっている(表 11)。主成分 2 は、「音楽、スポーツ、食文化、文学といった文化的分野の関心が高く、言語、社会、歴史への関心が低い」という特徴で(表 10)、東海 A(2017)を除いて、首都圏 A(第二)(2013, 2016, 2018)、北関東 A(2014,2016)、北関東 B(2017,2018,2019)と第二外国語で負荷が高く、首都圏 A(専攻)(2017,2018)、首都圏 B(専攻)(2014,201,2016,2019)、関西 B(2016)、関西 C(2016)と専攻学科では-0.2 以下の逆相関となっている(表 11)。主成分 3 は「政治、経済・産業、社会への関心が高く、言語と身近なネイティブへの関心が低い」という特徴で(表 10)、首都圏 A(専攻)(2014)、首都圏 A(第二)(2013,2014,2018)、首都圏 B(専攻)(2014,2015,2018)、北関東 A(2018)が高い一方、北関東 A(2016)、関西 C(2016)、東海 A(2017)、首都圏 C(2019)で-0.2 以下の逆相関となっており、傾向は専攻学科、第二外国語を問わず、また同じ大学でも年によって違いを見せることとなった(表 11)。主成分 4 は「音楽への関心が高く、身近なネイティブと文学がやや高く、それ以外への関心は低い」という特徴で(表 10)、首都圏 A(第二)(2015,2016,2017,2018)、東海 B(2016)、北関東

A(2018)の第二外国語で高く、首都圏 A(専攻)(2013)、首都圏 B(専攻)(2014)、関西 A(2014)の専攻学科、及び北関東 B(2017,2018)と例外的に首都圏 A(第二)(2013)で高い逆相関となった(表 11)。

以上を図 1 にまとめる。図の一段目は主成分の特徴、二段目は相関が高い大学、三段目は高めの逆相関の大学である。

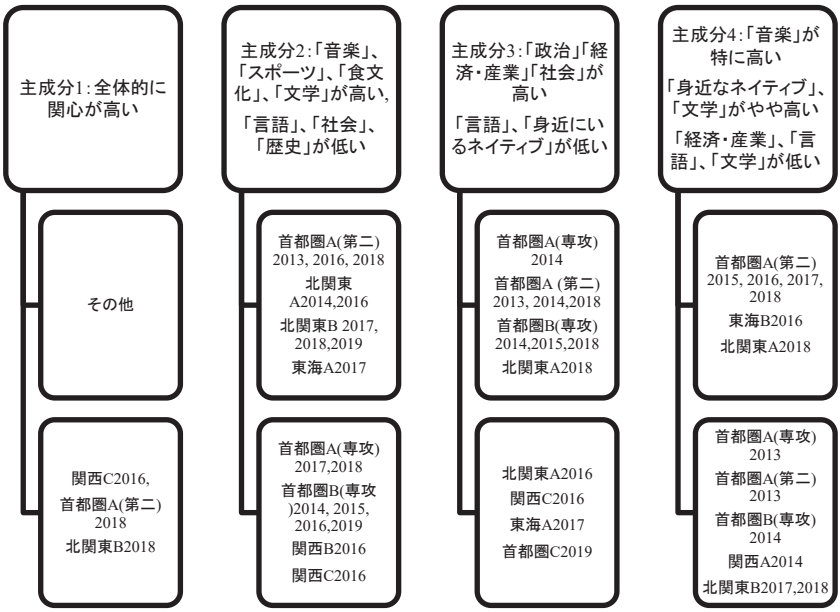

図 1 主成分分析のまとめ (二段目は相関が高い大学、三段目は逆相関の大学)

主成分分析の結果特徴的なのは、主成分 4 から首都圏 A(第二)で、文化的分野、特に「音楽」への関心が高いことであった (2013 年を除く)。また、主成分 2 に関して、首都圏 A(第二)、北関東 A、北関東 B の第二外国語で文化的分野に関心が高い一方、専攻学科、特に首都圏 B(専攻)では逆に関心が低いことも特徴的である。

5.3. 全体のまとめ

ここまでの分析結果をまとめる。まず、研究設問①に関し、ポルトガル

語圏、変種への関心はブラジルだけではなく、ポルトガルへの関心も高いことが分かった。ブラジルへ関心が集中するのは第二外国語授業を開講する一部の大学に限られた。

また、研究設問②に関しては、専攻学科と第二外国語で関心分野に違いが見られた。専攻学科では、大学あるいは年によって違いは見られるが、全ての分野へ関心が向けられる一方、第二外国語では主に「音楽」、「食文化」、「スポーツ」といった文化分野への関心が高かった。ただし、「美術」や「文学」への関心は低い傾向が見られた。また、全体的に「言語」への関心が高かった。

なお、大学ごとの特色は見られるが、地域的な強い特色は見られなかった。特に、大規模なブラジル人コミュニティーが存在する東海地方、北関東地方ではブラジルへの関心や、身近なネイティブとのコミュニケーションへの関心が高いというわけではなかった。

6. 考察

首都圏 A(第二)でブラジル及びブラジル変種への関心が高い点について、同大学にはブラジル研究サークルがあり、例年、同所属の学生が第二外国語のポルトガル語の授業を多く履修しており、これが影響していると見られる。また、関心分野についても「音楽」への関心が特に高く、各種サンバやボサノヴァに取り組む同サークル所属履修者の影響と見られる。

地域的にブラジルへの関心の高さが期待された北関東 A、B ともに関心があまり高くないのは、群馬県南西部（前橋市、高崎市、安中市ほか）や栃木県南部 (足利市、栃木市) からの通学者が多く、また、長野県や東北地方出身の履修者も少なくないことが要因として考えられる。経験則ではあるが北関東ではブラジル人コミュニティーが存在する群馬県太田市、大泉町、玉村町等以外では、少なくとも大学生にはブラジル系住民の存在があまり知られていない。これは、東部と西部で別の幹線を通じて東京と接続しており、東西の人の流れが活発ではないとみられ、これが影響していると考察される。北関東地方の人の流れに関しては別途、社会学的な調査研究を行って検証する必要がある。なお、北関東 A は美術学部やフランス語、イタリア語の授業もあり、これに影響されヨーロッパへの関心も高いと考えられる。

東海 A も同様で、ポルトガル語授業はブラジル人住民があまり多くな

い静岡県東部にあるキャンパスで開講されている。そのため、ブラジル人人口の多い県西部にある同大学の別キャンパスで授業を開講した場合、大きく結果が異なることが考えられる。

7. 結論に替えて

本稿では、日本の大学でポルトガル語を学習する学習者の関心を調査した。結果、ポルトガル語を学習する学生の関心はブラジル一色ではないことがわかった。これはつまり、学習者側からの需要としては、大学でのヨーロッパポルトガル語の授業や教材の潜在需要があることが示唆されている。また、割合は少ないものの、アジアやアフリカへの関心を持つ学生も一定数いることがわかった。

関心分野については、第二外国語の学生は文化的な分野に関心が偏るが、専攻学科の学生は多様な分野に関心を持っていることがわかった。専攻学科については、2019 年のシラバスから、各大学とも言語、歴史、文学に関する授業は多いが、政治、経済・産業、美術に関する授業は少ないとみられる。大学によってはこれらへの学生の関心が高いものの、学習する機会は限定的である。

なお、専攻学科、第二外国語ともに、地域性はほぼ見られなかった。

本稿では、収集したアンケートデータのうち、関心地域と関心分野を分析したが、事前知識や留学希望など、活用しきれていないデータがある。これらを含め、インフォーマントの出身地別、年齢別、長期的に収集した大学では年代別に対比することができる。また、「ブラジルへの関心」と「日本との関係への関心」、「アフリカへの関心」と「ヨーロッパ変種への学習希望」など、項目間の関連性を分析・対比をすることができる。本稿の分析結果にとどまらず、さらに分析して考察していきたい。

本稿調査の反省点として、調査項目及び選択肢の妥当性が挙げられる。方法論でも述べたが、特に関心分野の選択肢の中には包含関係や客観的に線引きが難しい項目もある。また、Bateman & Oliveira (2014) のような動機付け研究に基づいたものでもない。今後、調査を継続するにあたっては、本稿調査を踏襲しつつ、さらに選択肢の妥当性を考慮してアンケートをブラッシュアップする必要がある。

結びに、本稿は学習者の視点に立ったニーズアナリシスであるが、大学のカリキュラム・シラバスや教材開発は学習者のニーズだけに基づいて決

定されるものではない。ポルトガル語研究の領域でどのような地域、分野の研究が進んでいるのか、どのような研究人材がいるのかが主要な決定要因であろう。また、産・官がどういう人材を求めているのか、出口のニーズも重要な要因である。さらに、教材開発においては、市場規模も考慮しなくてはならない。しかし、それでもなお、学習者側のニーズは過小評価されるべきではないと考える。本稿及び後続の調査結果が活用され、ポルトガル語教育のカリキュラムの刷新に役に立てれば幸いである。また、引き続き最新のニーズ情報を蓄積していくことも課題である。

参照文献

Bateman, B. E. & Oliveira D. de A. (2014). Students' Motivation for Choosing (or Not) to Study Portuguese: A Survey of Beginning-level University Class. In Hispania 97.2 (2014), 264-280.

População dos países lusófonos mais do que duplicou nos últimos 50 anos. (2019, April 11). *ONU News*. Retrieved from https://news.un.org/pt/story/2019/04/1667931

京都外国語大学. (2018). 「ブラジルポルトガル語学科新入生調査集計報告書」.

総務省 (2019). 「国籍・地域別在留外国人数の推移」. http://www.moj.go.jp/content/001289225.pdf (2020 年 3 月 22 日閲覧)

鳥越慎太郎. &. 山田将之. (2015). 「CEFR-J に基づくポルトガル語教材の目標習熟度の考察」. 外国語教育学会第 19 回大会口頭発表. 東京外国語大学.

内藤理佳. (2019). 『ポルトガルのポルトガル語』. 白水社.

謝辞

本稿アンケート調査にご協力いただいた市之瀬敦先生、彌永史郎先生、江口佳子先生、儀保ルシーラ悦子先生、高阪香津美先生、鳥居怜奈先生、水沼修先生、宮入亮先生、村松英理子先生、吉野朋子先生 (五十音順)、並びに各大学学生の皆様に感謝申し上げます。

Pesquisa de Motivação e Interesse dos Estudantes Universitários Japoneses em Estudar a Língua Portuguesa

Shintaro Torigoe

Este artigo tem como objectivo pesquisar as motivações dos estudantes universitários do Japão que estudam a língua portuguesa. Actualmente, a maior parte das aulas de português nas universidades, quer do curso de português, quer aulas opcionais, visa ensinar o Português do Brasil (PB). Ademais, muitos livros e materiais de ensino da língua portuguesa também tratam o PB, e até apresentam a sociedade e cultura brasileira. Porém, com a experiência pessoal do autor como docente desta língua, há certo número de estudantes que se interessa no Português Europeu (PE) e a cultura africana e o autor questiona os currículos das universidades orientados exclusivamente ao PB. Esta dúvida liderou o autor a fazer questionário para estudantes universitários, durante o ano 2013 e 2019. Como resultado, o autor encontrou de que o considerável número de estudantes se interessa ambos pelo PB e PE, irrelevante aos locais das universidades e às formas de aulas (de curso ou opcionais). Por outro lado, algumas universidades mostram a tendência nas áreas de estudo interessadas.